

# 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成

田 坂 一 子

## 問題と目的

### 1. はじめに

近年、児童虐待が社会的な問題とされ、子育てに悩む母親の姿が取りざたされている。そのような中で、核家族化や少子化といった社会状況の変化が指摘され、母親の認知的側面に焦点が当てられた研究が多くなされるようになってきた。とりわけ、育児における自己効力感、ストレスフルな環境になるほど育児に関する達成能力を左右すると言われている。しかし、日本では育児自己効力感を測定する尺度に注目した研究がないのが現状である。本研究では、育児自己効力感尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行いたいと思う。

### 2. 自己効力感 (self-efficacy) とは

Bandura (1977) は、自己効力感を「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である」と定義しており、坂野 (1989) はこの確信は個人の行動の変容を予測し、不適応な情動反応や行動を変化させると指摘している。そして、この自己効力感様は様々な領域で理論的・実証的研究が行われ、その有用性が確認されている。

Coleman & Karraker (1997) によると、自己効力感、現在では、以下の3つに分けて考えられている。

1) 課題性自己効力感 (task-specific self-efficacy) : ある特定の課題や状況と結びついた課題特有の自己効力感。2) 領域性自己効力感 (domain self-efficacy) : 課題特有の自己効力感よりも広いが、パーソナリティ特性ほど一般的なものではない自己効力感。3) 一般性自己効力感 (general self-efficacy) : 概念的に関連がない多くの行動領域にまたがって般化したものであり、様々な行動や状況と関連する安定したパーソナリティ特性である自己効力感。

### 3. 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) とは

最近、自己効力感の概念が育児の領域に適用され、育児自己効力感として注目されている。育児自己効力感とは、「親としてどのくらい有能かつ効果的にふるまうことができるかという程度に関する親の期待」である (Teti & Gelfand, 1991)。つまり、育児役割においてうまくやっていくことができるという、親としての能力に対する自信であると考えられる (Coleman & Karraker, 1997)。

育児自己効力感についての研究は全般的に少ないが、育児自己効力感が、育児に対する個人的な満足感や適応、そして親が子どもに与えることのできる心理的または物理的環境の質を理解するための変数として重大であることが明らかにされている。つまり、育児自己効力感、育児に関する達成能力を左右し、その結果、子どもの行動と発達に影響を与えるものであると解釈できる。また、育児自己効力感が親の社会・経済的状況と育児行動との媒介変数になっている (Teti & Gelfand, 1991 など) とすれば、不幸な状況にある親が育児自己効力感を維持できるように介入することは、重要な援助となる。したがって、育児自己効力感について研究することは重要であると考えられる。

しかし、育児自己効力感を測定する尺度に関心を向けた研究はわずかであり、妥当な育児自己効力感尺度がないのが現状である。とくに日本で育児自己効力感尺度の作成に注目した研究はなく、育児自己効力感を測定する質問紙尺度を作成することは、意義のあることだと思われる。

育児自己効力感尺度を作成した先行研究では、「課題性」と「領域性」のそれぞれのレベルで作成した尺度があるが、課題レベルでの尺度は、非常に限定された範囲の親の行動しか測定できず、親の様々な行動を対象にする場合には項目数が膨大になることを考えると、質問紙尺度であれば領域レベルの尺度が有用であると思われる。

領域レベルの育児自己効力感尺度で、文献を通して内容が確認できるものには次のようなものがある

(Coleman & Karraker, 1997)。

- ・ Parental Self-Agency Measure (PSAM: Dumka et al., 1996)
- ・ Parenting Sense of Competence Scale - Parenting Self-Efficacy Subscale (PSOC: Gibaud-Wallston & Wandersman, 1978; Johnston & Mash, 1989による引用)
- ・ Parental Locus of Control Scale - Parental Efficacy Subscale (PLOC: Campis et al., 1986)

PSOC や PLOC は別の尺度の下位尺度であるが、PSAM は育児を1つの領域とみなし、その領域における自己効力感を測定しようとする領域性の尺度である。しかし、質問紙尺度を作成する上では、育児を個々の課題レベルまで細分化することは適切でないものの、PSAM のように育児を全般的に取り扱うよりはもう少し広く、いくつかの主要な役割に分けて考えることが、実際の研究や援助の上では有効ではないかと思われる。そこで本研究では、役割ごとの自己効力感がわかるような尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行うことを第一の目的とする。また外国で作成された上記の3尺度の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討するとともに、筆者が作成した尺度と比較検討する。

なお、育児自己効力感を測定する項目の内容は、子どもの発達段階によって違って来るであろうし、子どもの発達に伴って親の育児自己効力感自体も変化することが予想される。したがって、あらゆる年齢の子どもに通じるような尺度を作成することは難しいので、今回は幼児期の子どもを持つ母親の育児自己効力感に限定する。

#### 4. 尺度の作成

Bornstein (1995) は、乳幼児の世話における重要な4つの機能の特徴として、1) nurturant caregiving, 2) maternal caregiving, 3) social caregiving, 4) didactic caregiving をあげ、子どもはこれらを特徴とする物理的・社会的環境で育てられ、それらに影響されながら適応していくとしている。また、戸田(1998)によると、Baumrind は応答性 (Responsiveness) と統制 (Demandingness) を軸にした養育スタイルモデルを考えており、Robinson, Mandleco, Olsen, & Hart はこの養育スタイルが仲間関係における幼児のコンピテンスや社会的スキルと関連があることを明らかにしている。さらに、古澤 (1991) は、生後まもなくから始まる乳児と養育者とのやりとりにおいて、養育者の情動調律 (affect attunement) とよばれる応答性が重要であると述べて

いる。この情動調律、つまり子どもの気持ちや感情をくみとりそれにうまく反応することは、乳児だけに限らず、幼児の養育においても重要であり、子どもが対人関係を築いていく上で欠かせない基盤となるものである。

これらの研究から、幼児期の育児において次の3側面の効力感が重要であると考えられる。まず、子どもの情緒を安定させるために、親が子どもの気持ちをくみ取り、それを満足させたりコントロールしたりすることができるという自信、つまり「情緒的応答に関する側面」である。次に、子どもに基本的な生活習慣や社会性を身につけさせることができるという自信、つまり「しつけ・教育に関する側面」、そして遊びを通して子どもの興味や関心を広げていくことができるという自信、つまり「遊びに関する側面」が考えられる。そこで、これらの側面に沿って23項目を作成し、育児自己効力感尺度の試案とした。また、先に述べた PSAM, PSOC, PLOC という尺度を邦訳し、日本語版を作成した。

## 研究 1

### 【目的】

予備調査として今回作成した育児自己効力感尺度と3つの邦訳尺度の項目の選定、および信頼性・妥当性の検討を行う。

### 【方法】

①今回作成した育児自己効力感尺度、②邦訳尺度：PSAM, PSOC, PLOC、③妥当性の検討のために用意した4項目を、幼児をもつ母親154名(平均年齢32.6才)に実施。なお、評定はすべて6段階。

### 【結果と考察】

#### (1) 育児自己効力感尺度の分析

各項目の平均値が偏る2項目を削除し、残りの21項目を因子数を変えながら分析を行ったところ(主因子法プロマックス回転)、3因子が妥当と思われた。そして、因子負荷量の低い項目を削除した結果、15項目が残った。しかし、抽出された因子は事前に想定したものと違う因子と思われたので、改めて考え直し、次のように解釈した。

第I因子は、子どもと良い関係をつくるために母親が積極的に働きかけ、子どもに満足感を与えることができることを示していると思われるので、「子どもへ

の積極的関わりの自信」と解釈した。第Ⅱ因子は、子どもが不安になったり混乱したりした時に、母親が子どもを落ち着かせたり安心させたりできることを示していると思われるので、「子どもを安堵させる自信」と解釈した。第Ⅲ因子は、母親が子どもに言い聞かせたり注意したりすることによって、子ども自身に自分をコントロールする能力を身につけさせることができることを意味していると思われるので、「子どもに自己統制させる自信」と解釈した。これらの項目をそれぞれまとめて下位尺度を構成したところ、信頼性係数( $\alpha$ )は、.87, .70, .67であった。

育児自己効力感尺度の全体得点および下位尺度得点と妥当性検討項目との相関係数を算出したところ、比較的高い相関を示した(表1)。

#### (2) 邦訳尺度の分析

それぞれの尺度について Item-Total 相関分析を行い、全体との相関が低い項目(0.3未満)を削除し(PSAM…2項目, PLOC…2項目)、主成分分析を行った。PSAM, PSOC, PLOCの第Ⅰ成分の寄与率はそれぞれ50.8%, 53.5%, 33.1%で、第Ⅱ成分と大きな差があり、各項目の第Ⅰ成分への負荷量も高かった。

また、PSAM, PSOC, PLOCの信頼性係数( $\alpha$ )は、それぞれ.86, .84, .69であった。PLOCについては信頼性係数の低さや項目内容のわかりにくさ等から、今回は分析の対象外とした。

PSAM, PSOCそれぞれの各項目の合計得点と妥当性検討項目との相関係数を算出したところ、比較的高い相関を示した(表2)。

#### (3) 各尺度間の相関

育児自己効力感尺度の全体得点および下位尺度得点は、PSAM, PSOCのどちらとも比較的高い相関を示した(表3)。

以上のことから、育児自己効力感尺度とPSAM, PSOCについては、ある程度の信頼性・妥当性をもつ項目が選定されたと考えられる。

ただし、PSAMとPSOCについては、妥当性検討項目や今回作成した育児自己効力感尺度全体との相関がPSAMの方が高いことや、以下の理由により両尺度の類似性が高いと考えられることから、以降の調査ではPSAMのみを用いる。

- a. 2つの尺度の相関が高い(0.67)。
- b. PSAMがPSOC・PLOCを基に作成されている。

表1 育児自己効力感尺度と妥当性検討項目との相関

妥当性検討項目	育児自己効力感尺度			
	全体	子どもへの積極的関わりの自信	子どもを安堵させる自信	子どもに自己統制させる自信
1. 私は、子育てに自信がある	0.573**	0.530**	0.447**	0.327**
2. 私は、子育てについての知識が多いほうだ	0.440**	0.466**	0.257**	0.231**
3. 私の子どもは、うまく育っていると思う	0.553**	0.544**	0.322**	0.382**
4. 私は、子育てのことで他の親の相談にのってあげられると思う	0.541**	0.508**	0.344**	0.392**

\*\* :  $p < .01$

表2 邦訳尺度と妥当性検討項目との相関

妥当性検討項目	PSAM	PSOC
1. 私は、子育てに自信がある	0.618**	0.585**
2. 私は、子育てについての知識が多いほうだ	0.474**	0.453**
3. 私の子どもは、うまく育っていると思う	0.485**	0.396**
4. 私は、子育てのことで他の親の相談にのってあげられると思う	0.527**	0.398**

\*\* :  $p < .01$

表3 育児自己効力感と邦訳尺度との相関

	育児自己効力感尺度			
	全体	子どもへの積極的関わりの自信	子どもを安堵させる自信	子どもに自己統制させる自信
PSAM	0.765**	0.622**	0.722**	0.468**
PSOC	0.580**	0.562**	0.417**	0.321**

\*\* :  $p < .01$

- c. PSAM と PSOC の項目をこみにして因子分析 (主因子法) を行ったところ, PSAM と PSOC が別の因子として分離しなかった。

## 研究 2

### 【目的】

育児自己効力感尺度と PSAM について, 因子数と下位尺度の確認, 信頼性の検討を行う。

### 【方法】

#### (1) 育児自己効力感尺度について

研究 1 で第 II 因子と第 III 因子の項目数が少ないと思われたので, 各因子が最低 5 項目となるよう改訂した。また, 調査の際に被験者から表現のわかりにくさを指摘されたため, 内容が変わらないよう全項目を疑問文の形に作り直し, これを幼児をもつ母親 174 名 (平均年齢 32.5 才) に実施した。

#### (2) PSAM について

この尺度に関しても表現のわかりにくさの指摘があったため修正を行うが, PSAM はすでに他の研究でも使用されている尺度であるため, 疑問文のように大きく表現を変えず部分的に修正し (付録 1), 幼児をもつ母親 121 名 (平均年齢 32.2 才) に実施した。

### 【結果と考察】

#### (1) 育児自己効力感尺度について

因子分析 (主因子法プロマックス回転) を行ったところ, 研究 1 と同様の 3 因子が確認され, 累積寄与率は 43.58% であった。そして, 因子負荷量の低い項目を削除した結果, 14 項目が残った (表 4)。

下位尺度の項目のまとまりはほぼ研究 1 と同様であったが, 「子どもが自信がつくように良い所をほめることができますか」は因子 I から因子 II へ, 「子どもが聞き分けのない時には, 何を言っても無駄だと思いますか」は因子 II から因子 III への移動が見られた。これらの項目について検討した結果, それぞれの因子が研究 1 と同様に解釈できると判断された。また, それぞれの因子に負荷の高い項目をまとめて構成した下位尺度の信頼性係数 ( $\alpha$ ) は, .79, .78, .58 であり, ある程度の信頼性があると言える。

#### (2) PSAM について

Item-Total 相関分析を行ったところ, すべての項目が 0.48 以上であった。全項目について主成分分析を行った結果, 第 I 成分の寄与率は 48.0% であった。また, 第 II 成分と大きな差があり, 各項目の第 I 成分への負荷量も 0.58 以上であったことから, 研究 1 と同様の結果が見られた。また, PSAM の信頼性係数 ( $\alpha$ ) は .84 であり, 信頼性の高い尺度であるといえる。

表 4 因子分析結果 (主因子法プロマックス回転/パターン行列 N=174)

尺 度 項 目	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
1. 子どもとしっかり遊んで, 子どもの気持ちを満足させることができますか	0.87	-0.20	-0.04	0.59
13. 子どもは, あなたをよく遊んでくれる楽しい親だと思っていますか	0.73	-0.02	0.02	0.53
7. 子どもの年齢に合ったいろいろな遊びを教えてあげられますか	0.58	0.07	0.01	0.39
5. 子どもがまねのできるような良いお手本を見せることができますか	0.55	0.01	0.19	0.37
3. 忙しい時でも子どもの話を聞くことができますか	0.41	0.24	-0.30	0.35
9. 子どもの気持ちには敏感に反応できていますか	0.40	0.32	-0.06	0.40
16. 子どもが自信がつくように良い所をほめることができますか	-0.16	0.76	-0.08	0.44
14. 子どもがぐずった時に, なだめることができますか	-0.01	0.71	0.06	0.53
10. 子どもが不安そうにしている時, 言葉をかけて安心させることができますか	0.04	0.66	-0.08	0.44
17. 子どもの機嫌が悪い時でも, 落ち着いて話しかけてあげられますか	0.17	0.54	0.07	0.45
2. 子どもが泣き出した時, 泣きやませることができますか	0.10	0.45	0.24	0.39
4. 子どもに我慢させるべきことは我慢させられますか	0.14	0.07	0.69	0.56
8. 子どもがどうしても言うことを聞かない時には, 子どもの要求通りにしてしまいませんか (R)	-0.04	-0.18	0.67	0.42
6. 子どもが聞き分けのない時には, 何を言っても無駄だと思いますか (R)	-0.14	0.29	0.40	0.26
固 有 値	2.41	2.39	1.30	6.10

(R): 逆転項目

#### 因子間相関

因子	II	III
I	0.58	0.15
II		0.27

### 研究 3

#### 【目的】

育児自己効力感尺度と PSAM について、育児自己効力感と関連があると思われる養育態度との相関を通して妥当性の検討を行う。また、養育態度尺度との関連を通して、育児自己効力感を複数の側面に分けることの有用性について検討する。仮説としては次のように考えられる。

「子どもへの積極的関わりの自信」は、子どもを肯定的に評価し満足感を与えられる自信であるから、子どもに不満を抱き非難するような養育態度とは負の相関を示すであろう。「子どもを安堵させる自信」は、子どもを安心させ落ち着かせることができるという自信であるから、心配性で過干渉な養育態度とは負の相関を示すであろう。「子どもに自己統制させる自信」は、子どもの言いなりにならずさせるべきことはきちんとさせられる自信であるから、服従的な養育態度とは負の相関が見られるだろう。

#### 【方法】

- (1) 被験者：幼児をもつ母親 121 名（平均年齢 32.3 才）
- (2) 質問紙
  - ①育児自己効力感尺度
  - ②邦訳尺度：PSAM
  - ③TK 式幼児用親子関係検査：拒否的態度（不満・非難型）、支配的態度（厳格・期待型）、保護的態度（干渉・心配型）、服従的態度（溺愛・盲従型）、矛盾的態度（矛盾・不一致型）の 5 つの態度と 10 の型 80 項目から構成されている。評定は 4 段階。

#### 【結果と考察】

表 5 のように、「子どもへの積極的関わりの自信」が「不満」「非難」「厳格」などの養育態度と負の相関を示したことは、仮説どおりの結果である。そして、積極的関わりといっても、「干渉」「心配」「溺愛」とはほとんど相関が見られなかったことから、子どもを過度に甘やかしたり過保護にしたりする態度とは関連がないといえる。

「子どもを安堵させる自信」については、「積極的関わりの自信」の場合とほぼ同様の相関が見られ、「心配」や「干渉」との負の相関は予想したほど高くはなかった。むしろ、「期待」や「盲従」との負の相関が比較的高いことから、期待をかけすぎたり媚びたりすることのない態度と関連があるのである。

「子どもに自己統制させる自信」については、「盲従」との負の相関が他の 2 下位尺度よりも高く、仮説と一致する結果であった。また、「干渉」や「矛盾」との負の相関が比較的高いことから、子どもの自主性を大切にしながら一貫した姿勢で関わる態度と関連しているであろう。

このように、育児自己効力感尺度と PSAM の妥当性は養育態度との関連によってある程度証明されたと考えられる。また、育児自己効力感尺度の下位尺度は、予想とは違う部分もあったが、側面によって若干の相違が見られたことから、育児自己効力感を複数の側面に分けて考えることの有用性もある程度確認されたと思われる。

### 研究 4

#### 【目的】

母親の育児自己効力感は、先行研究からも子どもの

表 5 育児自己効力感尺度・PSAM と養育態度との相関

養育態度	育児自己効力感尺度				PSAM
	全体	子どもへの積極的 関わりの自信	子どもを安堵 させる自信	子どもに自己統制 させる自信	
不満	-0.469**	-0.400**	-0.375**	-0.235**	-0.493**
非難	-0.245**	-0.277**	-0.208*	0.001	-0.286**
厳格	-0.254**	-0.225*	-0.203*	-0.115	-0.249**
期待	-0.284**	-0.159	-0.269**	-0.215*	-0.279**
干渉	-0.126	-0.031	-0.078	-0.216*	-0.111
心配	-0.045	-0.143	0.136	-0.099	-0.198*
溺愛	0.039	0.099	0.025	-0.075	-0.054
盲従	-0.353**	-0.154	-0.237**	-0.471**	-0.340**
矛盾	-0.491**	-0.368**	-0.374**	-0.353**	-0.461**
不一致	-0.282**	-0.207*	-0.174	-0.266**	-0.328**

\*\* : p<.01 \* : p<.05

行動や発達に影響を及ぼすことが予想される。柏木(1988)は、幼児期の発達課題として「自己主張・表現」と「自己抑制」を挙げ、前者は拒否・強い自己主張、遊びへの参加、独自性・能動性の3側面を含み、後者は遅延可能、制止・ルールへの従順、フラストレーション耐性、持続的対処・根気の4側面を含むと考えている。したがって、これらの側面に対して母親の育児自己効力感が影響を与えるのではないかと考えられるので、母親の育児自己効力感と子どもの行動との関連を検討する。「子どもへの積極的関わりの自信」が高い母親は、子どもの発達を促進し、必要なスキルを身につけさせるような教育をしていると考えられる。したがって「遊びへの参加」との間に正の相関関係が見られるだろう。また、「子どもを安堵させる自信」が高い母親の子どもは、情緒の安定性と統制力が育ち、安心して自己主張もできると思われるので、「フラストレーション耐性」や「遊びへの参加」、「拒否・強い自己主張」との間に正の相関関係が見られるだろう。さらに、「子どもに自己統制させる自信」が高い母親の子どもは、自己統制の力を身につけていると思われるので、「制止・ルールへの従順」や「フラ

ストレーション耐性」との間に正の相関関係が見られるだろう。

### 【方法】

#### (1) 被験者

4才児クラスの母親45名(平均年齢33.0才)。子どもは男児25名、女児20名(平均年齢5.2才)。

#### (2) 質問紙

##### ① 育児自己効力感尺度

② 柏木(1988)が作成した「教師による幼児の行動評定尺度」:上記の4側面から合計20項目を選び、一部項目の表現を若干修正して用いた。評定は5段階。

#### (3) 手続き

まず、①の質問紙を家庭に持ち帰り記入してもらった。その後、保育園に質問紙が提出された母親の子どもについて、担任の保育士にひとりずつ②の質問紙での行動評定を依頼した。

### 【結果と考察】

育児自己効力感尺度の下位尺度得点および全体得点

表 6-1 育児自己効力感尺度と子どもの行動との相関

子どもの行動	育児自己効力感尺度			
	全体	子どもへの積極的 関わりの自信	子どもを安堵 させる自信	子どもに自己統制 させる自信
拒否・強い自己主張	0.027	-0.035	0.058	0.060
遊びへの参加	-0.018	-0.150	0.140	-0.008
制止・ルールへの従順	-0.084	-0.150	-0.013	-0.006
フラストレーション耐性	-0.085	-0.133	0.043	-0.112

表 6-2 育児自己効力感尺度と子ども(男児)の行動との相関

子どもの行動(男児)	育児自己効力感尺度			
	全体	子どもへの積極的 関わりの自信	子どもを安堵 させる自信	子どもに自己統制 させる自信
拒否・強い自己主張	0.199	0.131	0.163	0.218
遊びへの参加	0.058	-0.112	0.308	-0.025
制止・ルールへの従順	-0.220	-0.265	-0.043	-0.222
フラストレーション耐性	-0.314	-0.360	-0.100	-0.298

表 6-3 育児自己効力感尺度と子ども(女児)の行動との相関

子どもの行動(女児)	育児自己効力感尺度			
	全体	子どもへの積極的 関わりの自信	子どもを安堵 させる自信	子どもに自己統制 させる自信
拒否・強い自己主張	-0.211	-0.267	-0.056	-0.142
遊びへの参加	-0.102	-0.194	-0.014	0.015
制止・ルールへの従順	0.078	0.037	-0.048	0.253
フラストレーション耐性	0.352	0.288	0.267	0.230

と幼児の行動評定尺度得点との相関係数を、子ども全体、男女別に算出した(表6-1~3)。全体として、女子では母親の育児自己効力感と子どもの行動との相関は低く、最高でも絶対値が0.15程度である。男子では、絶対値で0.36程度の相関が見られるところがあるが、人数の少なさから有意にはなっていない。

男児の結果を見ると、「子どもを安堵させる自信」が「遊びへの参加」や「拒否・強い自己主張」と正の相関を示したことは、仮説通りである。しかし、母親の「積極的関わりの自信」は、子どもの「制止・ルールへの従順」や「フラストレーション耐性」と負の相関を示した。つまり、積極的関わりに効力感を感じている母親の子どもは制止・ルールに従わず、フラストレーション耐性が弱いという関連性がわずかにあるということである。また、母親の「子どもに自己統制させる自信」は、「拒否・強い自己主張」と正の相関を、「制止・ルールへの従順」や「フラストレーション耐性」と負の相関を示した。つまり、子どもに自己統制させることができる自信のある母親の子どもは自己主張が強く、制止・ルールに従わず、フラストレーション耐性が弱いという関連性が少しあるということである。これらは仮説とは反対の結果である。

このような結果が生じた理由として、育児に対する母親の認知と実際のずれや育児自己効力感以外の要因の関与が考えられなくもないが、この結果が見られたのが男児だけであることから、子どもの性別によって母親の育児の効果が異なることも考えられる。たとえば、制止・ルールへの従順を例にとれば、男児の場合、適切な育児をしており育児自己効力感の高い母親の子どもは、積極的かつ活発になる結果、柏木の尺度の制止・ルールへの従順やフラストレーション耐性の得点が高くなる傾向がある。また、このような場合、子どもの行動の評定に保育士の発達観や価値観の違いが入り込んでくるかもしれない。この点に関しては、より客観的な指標として、子どもの行動の直接観察等を用いて明らかにしていかなければならない。

## 研究 5

### 【目的】

研究4では母親の育児自己効力感と子どもの行動との関連を検討したが、育児自己効力感の高さにより、実際の養育態度も違ってくと予想でき、結果的にその養育態度が子どもの行動に影響を及ぼすと考えられ

る。したがって、母親の育児自己効力感と養育態度を組み合わせ、子どもの行動との関連を検討する。

母親の育児自己効力感と養育態度を組み合わせる考えるとき、例えば、育児自己効力感が高い母親は、厳しい養育態度をとらなくても子どもに期待通りの行動をさせることができ、子どもは母親の態度への満足感から母親が期待する行動をとるであろう。したがって、育児自己効力感が高い場合には、養育態度が厳格でない方が子どもの発達課題達成度は高いであろう。反対に、育児自己効力感が低い母親は、子どもの行動に影響を与える自信が乏しいので、厳しい養育態度をとらなければ期待通りの行動をさせることができないと思われる。したがって、育児自己効力感が低い場合には、養育態度が厳格な方が子どもの発達課題達成度は高いだろう。

### 【方法】

(1) 被験者：研究4と同じ

(2) 質問紙

①育児自己効力感尺度

②TK式幼児用親子関係検査の「厳格型」の下位尺度8項目

③柏木(1988)が作成した「教師による幼児の行動評定尺度」

(3) 手続き

研究4と同じであり、研究4と併せて実施した。

### 【結果と考察】

(1) 各尺度の得点分布と群分け

母親45名の育児自己効力感尺度の下位尺度得点・全体得点、および厳格型養育態度尺度得点について、平均値付近を境にしてそれぞれ高群と低群とに分けた。

(2) 性別×育児自己効力感×養育態度による分散分析

子どもの性別、母親の育児自己効力感の各下位尺度得点と全体得点の高・低、厳格型養育態度得点の高・低を組み合わせ、母親を群分けした。そして、子どもの行動を従属変数として、子どもの性別、母親の育児自己効力感、厳格型養育態度を要因とする3要因の分散分析を行った。従属変数は、①拒否・強い自己主張、②遊びへの参加、③制止・ルールへの従順、④フラストレーション耐性の得点であり、要因の組み合わせは、性別×子どもへの積極的関わりの自信×厳格型養育態度、性別×子どもを安堵させる自信×厳格型養育態度、性別×子どもに自己統制させる自信×厳格型

養育態度、性別×育児自己効力感全体×厳格型養育態度の4種類である。要因の交互作用が見られた場合には単純主効果の検定を行った。以下に、結果を行動別に示す。

#### ◆分散分析の検討

**拒否・強い自己主張** 性別、育児自己効力感、養育態度それぞれの主効果は見られず、交互作用も有意ではなかった。

**遊びへの参加** 性別と「子どもを安堵させる自信」の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 37)=3.68, p<.10$ ) (図1)。男児では、「子どもを安堵させる自信」が高い方が「遊びへの参加」得点が高かった。そして、男児における「子どもを安堵させる自信」の単純主効果は有意傾向であった ( $F(1, 37)=3.70, p<.10$ )。女児では、「子どもを安堵させる自信」が低い方が「遊びへの参加」得点が高かった。しかし、女児における「子どもを安堵させる自信」の単純主効果は有意でなかった。

また、性別、「子どもを安堵させる自信」、「厳格型養育態度」の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 37)=3.83, p<.10$ ) (図2)。男児では、「子どもを安堵させる自信」が低い場合には、「厳格型養育態度」が高い方が「遊びへの参加」得点は高かった。しかし、「子どもを安堵させる自信」が低い場合には、「厳格型養育態度」の単純主効果は有意ではなかった。また、「子どもを安堵させる自信」が高い場合には、「厳格型養育態度」が低い方が「遊びへの参加」得点が高かった。「子どもを安堵させる自信」が高い場合には、「厳格型養育態度」の単純主効果は有意であった ( $F(1, 37)=4.90, p<.05$ )。女児では、「子どもを安堵させる自信」の高さに関わらず、「厳格型養育態度」の高低で「遊びへの参加」得点に男児のような差が見られなかった。

**制止・ルールへの従順** 育児自己効力感の3側面と全体のいずれを性別および厳格型養育態度と組み合わせた場合にも、性別の主効果が見られた ( $F(1, 37)=14.19, 14.31, 13.11, 18.06$ , すべて  $p<.01$ ) (図3~6)。男児の方が女児に比べて、制止・ルールへの従順の得点が有意に低かった。

さらに、性別、「積極的関わりの自信」、「厳格型養育態度」の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 37)=3.51, p<.10$ ) (図3)。男児では、「積極的関わりの自信」が低い場合には、「厳格型養育態度」が高い方が

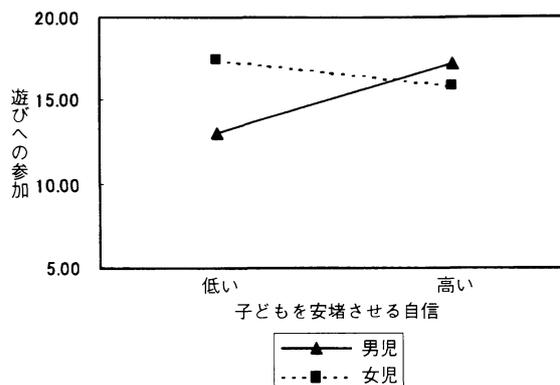


図1 男女別子どもを安堵させる自信の高低による遊びへの参加得点

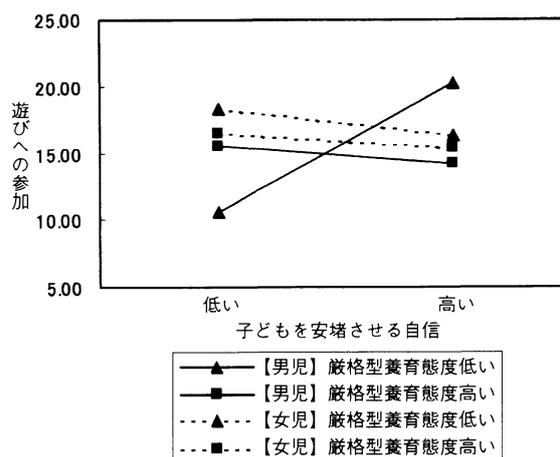


図2 男女別子どもを安堵させる自信と養育態度の高低による遊びへの参加得点

「制止・ルールへの従順」得点は高かったが、「厳格型養育態度」の単純主効果は有意ではなかった。また、「積極的関わりの自信」が高い場合には、「厳格型養育態度」が低い方が「制止・ルールへの従順」得点は高く、「厳格型養育態度」の単純主効果が有意であった ( $F(1, 37)=5.64, p<.05$ )。女児では、「積極的関わりの自信」の高さにかかわらず、「厳格型養育態度」の高低で「制止・ルールへの従順」得点にほとんど差が見られなかった。

また、性別、「育児自己効力感全体」、「厳格型養育態度」の交互作用が有意であった ( $F(1, 37)=4.76, p<.05$ ) (図6)。男児では、「育児自己効力感全体」が低い場合には、「厳格型養育態度」が高い方が「制止・ルールへの従順」得点は高かったが、「育児自己効力感全体」の単純主効果は有意ではなかった。また、「育児自己効力感全体」が高い場合には、「厳格型養育態度」が低い方が「制止・ルールへの従順」得点は高く、「厳格型養育態度」の単純主効果は有意であった ( $F(1, 37)=4.15, p<.05$ )。女児では、「育児自己効力

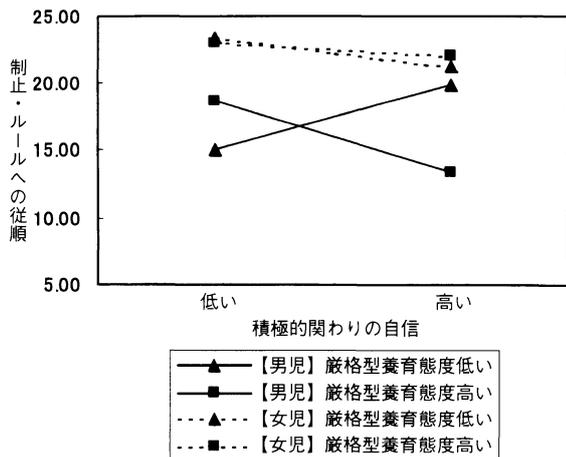


図3 男女別積極的関わりの自信と養育態度の高低による制止・ルールへの従順得点

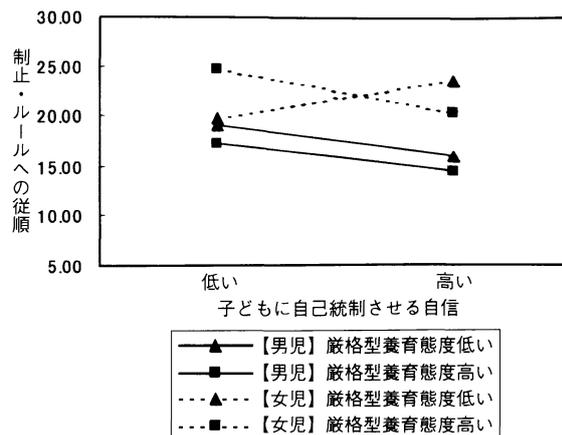


図5 男女別子どもに自己統制させる自信と養育態度の高低による制止・ルールへの従順得点

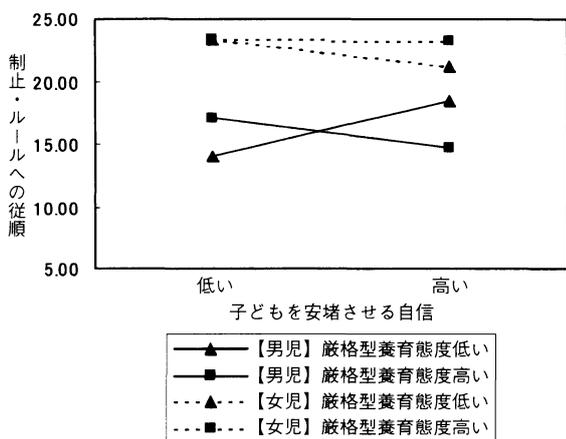


図4 男女別子どもを安堵させる自信と養育態度の高低による制止・ルールへの従順得点

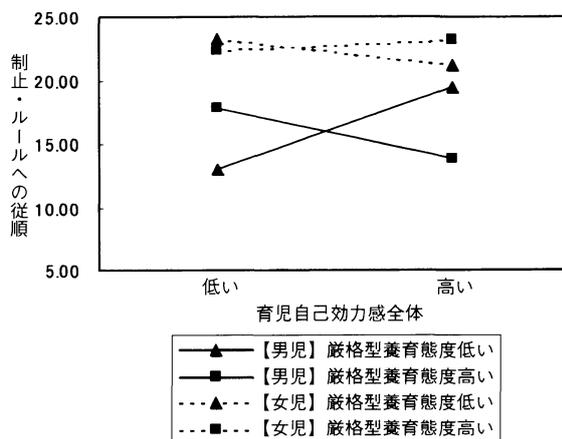


図6 男女別育児自己効力感全体と養育態度の高低による制止・ルールへの従順得点

感全体」の高さに関わらず、「厳格型養育態度」の高低で「制止・ルールへの従順」得点に男児のような差が見られなかった。

フラストレーション耐性 性別と「子どもに自己統制させる自信」の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 37) = 2.86, p < .10$ ) (図7)。男児では、「子どもに自己統制させる自信」が低い方が「フラストレーション耐性」得点は高く、「子どもに自己統制させる自信」の単純主効果は有意傾向であった ( $F(1, 37) = 3.12, p < .10$ )。女児では、「子どもに自己統制させる自信」が高い方が「フラストレーション耐性」得点が高かったが、「子どもに自己統制させる自信」の単純主効果は見られなかった。

以上のことから、男児において、効力感が高い母親の場合には、厳格型養育態度が低いほど「遊びへの参加」「制止・ルールへの従順」得点が高く、また効力

感が低い母親の場合には、厳格型養育態度が高いほど「制止・ルールへの従順」得点は高いことが示唆された。

「制止・ルールへの従順」における交互作用の理由については、次のように考えられる。母親の効力感が高い場合には、母親も子どももお互いに相手に満足しているため、母親が支配的にならなくても子どもは自制したり我慢したりでき、母親が支配的だとかえって逆効果になるのであろう。逆に、母親の効力感が低い場合には、母親も子どもも相手に対して満足しておらず、母親が支配的にならないと子どもが言うことを聞かないため、母親が厳格でないなら「制止・ルールへの従順」得点が低く、母親が厳格なら「制止・ルールへの従順」得点が高くなるのであろう。「遊びへの参加」についても、母親の効力感が高い場合は、支配的な養育態度でなければ子どもがのびのびと積極的に活動できるようになると思われるので、「遊びへの参加」

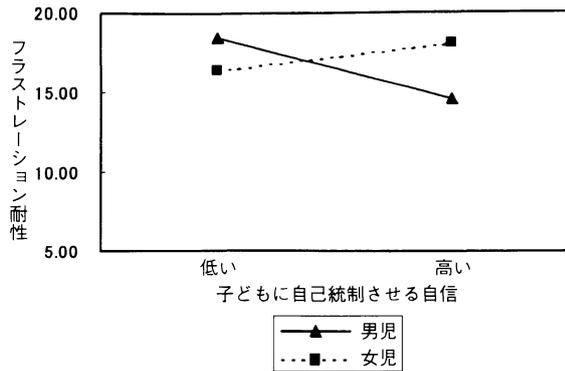


図7 男女別子どもに自己統制させる自信の高低によるフラストレーション耐性得点

得点が高くなると予測できる。

しかし、これらの交互作用は男児のみに見られ、女児では有意な結果が見られなかった。これについては、男児と女児で性別特有の行動表出の違いがあるのではないかと考えられる。母親の発達期待や関わりにおいて、男児では元気で活発に育つよう積極的に促進することが、女児では柏木(1988)が述べているように従順で自己抑制ができる子どもに育てることが、社会的望ましさとして重要視されるとすれば、今回取り上げたような行動では、女児よりも男児の方がそこに母親の効力感や養育態度の影響が反映されやすいのかもしれない。ただし、このような考察は推測にすぎず、さらに検討が必要である。

## ま と め

幼児期の子どもをもつ母親の育児自己効力感を測定する尺度を作成することが本研究の目的であった。筆者が作成した育児自己効力感尺度については、因子分析の結果、「子どもへの積極的関わり自信」「子どもを安堵させる自信」「子どもに自己統制させる自信」という3つの因子が見出され、それぞれの下位尺度は妥当性検討項目や邦訳尺度 PSAM および PSOC と比較的高い相関を示した。

さらに、この育児自己効力感尺度の妥当性を検討するため、母親の養育態度や子どもの行動との関連を検討した。養育態度との関連については、否定的な態度との間に有意な負の相関を示した。また、邦訳尺度とは違い、筆者の育児自己効力感尺度は、下位尺度ごとに養育態度との相関が若干異なっていたことから、その有用性がある程度確認された。子どもの行動との関連については、分散分析の結果、いくつかの面で子どもの性別×母親の育児自己効力感×母親の厳格型養育

態度の3要因の交互作用が有意であった。

以上により、本研究で作成した育児自己効力感尺度の信頼性と妥当性がある程度確認されたと思われるが、一部の低位尺度の項目数の少なさや信頼性係数の低さ、妥当性の検討における養育態度との関連のばらつき、子どもの行動との関連の不明確さ、回答者数の少なさなど、今後検討すべき問題も残された。

## 引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bornstein, M. H. 1995 Parenting infant. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting* (Vol. 1, pp 3-39). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Campis, L. K., Lyman, R. D., & Prentice-Dunn, S. 1986 The parental locus of scale: Development and Validation. *Journal of Clinical Child Psychology*, **15**, 260-267.
- Coleman, P. K., & Karraker, K. H. 1997 Self-efficacy and Parenting Quality: Findings and Future Applications. *Developmental Review*, **18**, 47-85.
- Dumka, L. E., Stoerzinger, H. D., Jackson, K. M., & Roosa, M. W. 1996 Examination of the cross-cultural and cross-language equivalence of the Parenting Self-Agency Measure. *Family Relations*, **45**, 216-222.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 古澤頼雄 1991 助産学講座3 母性の心理・社会学 医学書院
- Johnston, C., & Mash, E. J. 1989 A measure of parenting satisfaction and efficacy. *Journal of Clinical Child Psychology*, **18**, 167-175.
- 坂野雄二 1989 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, **2**, 73-82
- Teti, D. M., Gelfand, D. M. 1991 Behavioral competence among mothers of infants in the first year: The mediational role of maternal self-efficacy. *Child Development*, **62**, 918-929.
- 戸田須恵子 1998 母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究 北海道教育大学紀要(第1部C), **48**, 49-62.

## 付録1 PSAM (Parental Self-Agency Measure)

- ・母親であることに自信をもっている
- ・子どものために頑張って何をして、思い通りにしてくれない (R)
- ・子どもと何かうまくいかない事がある時は、どうすることもできない (R)
- ・一人の母親としてうまくやっていると思う
- ・母親としての役割を果たせていないと感じる (R)
- ・母親としてどうふるまったらいいのかをよく知っている
- ・子どもとの間で起きる問題は、たいてい解決することができる
- ・子どもとどううまくいかない事があると、うまくいくまで頑張り続ける

(R): 逆転項目